様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５９０１０３

研究課題名（和文）「人生雑誌」の歴史社会学的研究：「大衆とインテリの狭間」のメディア文化史

研究課題名（英文）Historical sociology of magazines of "way of life"

研究代表者
福間　良明（FUKUMA, Yoshiaki）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：７０３８０１４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後の「人生雑誌」史を洗い出し、「大衆とインテリの狭間」の層のメディア受容を分析した。『葦』（1949-1960）、『人生手帖』（1952-1974）といった人生雑誌は、戦後多く創刊され、幾度かのブームも見られた。人生雑誌は勤労学生や集団就職者を主な読者とし、彼ら自身も寄稿した。彼らは知識人ではなかったが、上級学校進学の憧れがあり、知的なものへの憧憬を抱き、遊興のみに自己を埋没させることを拒んだ。本研究は、「大衆かインテリか」でなく、その狭間で煩悶する人々のメディア史に照準し、彼らの屈折がいかなる言説を生み出したのか、人生雑誌はいかなるメディア機能を有していたのかを考察した。

研究成果の概要（英文）：This research analized the media history of the people between intellectuals and the masses through examining the historical tranformation of the "way of life" magazines in postwar Japan. These magazines were published in the early postwar era, and some of them, such as "Jinsei Techo" and "Ashi", were accepted widely by younger generation of working class. Why were they interested in metaphisical "way of life"? Why didn't they focus on only the benefit which they could gain through their job?
Examining these questions, this research analized the working class youth's admire for liberal arts in early and middle postwar period.

研究分野：メディア史

キーワード：人生雑誌　大衆教養主義　戦争の記憶　反知性主義的知性主義　格差のメディア史

１．研究開始当初の背景

従来のメディア研究では、主に「インテリ」もしくは「大衆」に焦点が当てられてきた。前者は総合雑誌研究、後者はポピュラー文化研究が代表的なものである。だが、人々（あるいは読者）は、「大衆かインテリか」という二項対立図式で区分できるものではない。「大衆」層ではあっても、娯楽のみに埋没することを厭い、上級学校への進学への憧れを抱いたり、知的なもの（文学、哲学、倫理など）に関心を抱く人々も多かった（庶民的教養主義）。勤労学生はその代表的な存在であろうし、家計の困難から集団就職をした人々の中にも、こうした層は少なくなかった。

しかも、彼らは決して例外的な存在ではなかった。戦後日本の社会・経済は、彼らのように、遊興に溺れるのではなく、「まじめ」に仕事や生活に向き合った末端の人々によって支えられたのではないか。だが、従来のメディア史研究は、こうした層の存在を視野に入れることはなく、必然的に彼らを主たる読者・書き手とした人生雑誌を扱うこともなかった。戦後社会とメディア史の関わりを考察するのであれば、彼らの存在を直視することは、決定的に不可欠である。

もっとも、近年のサークル史研究では、地方労働者の文筆実践の歴史が掘り起こされつつある。だが、そこでも「インテリとは異質な大衆」が前提視されており、知的なものへの憧憬を抱えた人々の鬱屈や葛藤が焦点化されているわけではない。本研究では、従来、顧みられなかった人生雑誌史を掘り起こし、「大衆とインテリの狭間」で紡がれるメディアの力学を検証する。

２．研究の目的

本研究は、メディア史研究で全く顧みられなかった戦後の「人生雑誌」史を洗い出し、「大衆とインテリの狭間」の層の社会認識やメディア受容を分析する。『葦』(1949-1960)、『人生手帖』(1952-1974)、『ＰＨＰ』(1946-）といった人生雑誌（「いかに生きるべきか」を主題とする非宗教系の雑誌）は、戦後多く創刊され、幾度かのブームも見られた。人生雑誌は勤労学生や集団就職者を主な読者とし、彼ら自身も寄稿した。彼らは知識人ではなかったが、上級学校進学の憧れがあり、知的なものへの憧憬を抱き、遊興のみに自己を埋没させることを拒んだ。本研究は、「大衆かインテリか」でなく、その狭間で煩悶する人々のメディア史に照準し、(1) 彼らの屈折がいかなる言説を生み出したのか、(2) 人生雑誌はいかなるメディア機能を有していたのかを考察する。

３．研究の方法

＜読者共同体の分析＞

本研究では、こうした問題関心を念頭に置きながら、『葦』『人生手帖』といった人生雑誌の歴史を時系列的に跡付けていく。なかでも、人生雑誌というメディアが社会的にいかなる機能を有したのかという点に、重きを置く。

「人生」「社会」「教養」について考えたいのであれば、書物を手に取ったり、サークル等の集まりで議論を重ねればよいのかもしれない。だが、勤労青年たちは、それではなく、あるいはそれに飽き足らずに、『葦』『人生手帖』といった雑誌メディアを購読した。

書物は、書き手が記したものを読み手が一方的に享受するメディアであるが、雑誌はそれとはやや異なる。識者の文章に加えて、読者投稿欄など、読者たちが感想や思いを公開する場が設けられているのが通例である。人生雑誌の場合は、さらに読者による長文の体験記・手記・創作も多く掲載され、識者や編集部はむろんのこと、別の読者たちによるそれへの批評が扱われることも珍しくなかった。書籍に比べれば、そこには、読者相互の、あるいは編集部をも交えた一定のコミュニケーションが成立している。かつ、雑誌は定期的に刊行されるものであるがゆえに、そのコミュニケーションは持続性を帯びることになる。いわば、読者たちの「想像の共同体」が継続的に形成されるさまを読みとることができる。

では、「人生」や「教養」を考えるうえで、書籍だけではなく、雑誌というメディアが、なぜ必要とされたのか。大衆教養主義が成立するうえで、雑誌というメディアはいかなる機能を有していたのか。

他方で、雑誌の閲読は、サークル活動のような対面状況のコミュニケーションともまた異なるものである。たしかにサークル活動であれば、濃密な議論を交わすことも可能かもしれない。だが、時間や場所の制約を伴うため、参加できる者には限りがある。ことに地方では、都市部とは異なり、サークルの数も少なく、テーマ的にも居住地からの距離の点でも、選択肢は限られる。雑誌であれば、これらの制約はかなりの程度、解消されるわけだが、そのことがいかなる大衆教養主義や読者相互の「想像の共同体」を生み出したのか。

＜「査読」の存在＞

人生雑誌とサークル機関誌との相違も、重要である。サークル機関誌の場合、基本的に読者は会員に限られ、また投稿する際にもハードルの高い審査があるわけではない。むしろ、誌面が埋まらず、寄稿を懇願されるケースもしばしば見られた。それに対し、『葦』や『人生手帖』は、投稿された原稿すべてが掲載されたわけではない。全国の書店で販売されるものであっただけに、一定水準に達している必要があり、そうでない場合は掲載は見送られた。

もっとも、後述するように、各地域には『葦』なり『人生手帖』なりの読者サークルも存在したが、読者サークル機関誌と『葦』

『人生手帖』等とでは、掲載の難易度は大きく相違していた。さらに言うなれば、これらの雑誌を発行した葦出版社や文理書院は、評価の高かった読者の手記を集めて書籍刊行したり、連載のうえ単著書籍として発刊することも多かった。それが書き手の自負をくすぐり、また読者もいくらかなりとも羨望を抱いたことは想像に難くない。

サークル会員に閉じた機関誌への寄稿とは異なり、人生雑誌に文筆が掲載されることは、全国に読者を獲得するのみならず、編集部による一定の評価を受けたことを証し立てる。その意味で、人生雑誌は査読のメディアであり、掲載された書き手の威信を高めるものでもあった。だとすれば、人生雑誌のこうした特性は、勤労青年たちの教養への希求をいかに後押ししたのか。進学をめぐる彼らのコンプレックスに、いかなる作用を及ぼしたのか。

＜「知識人への反感」と「知への憧憬」＞

人生雑誌には知・教養への憧れと同時に、知識人層への苛立ちも、しばしば吐露されていた。「インテリーこそ先づ前時代的な古めかしい特権意識を捨てなくてはならない」という指摘や「自己の栄達を大衆の犠牲に於て行つて来たインテリゲンチヤの利己主義と徹底した民衆の侮蔑」への批判は、決して珍しいものではなかった 。上級学校に進学できなかったがゆえに知的エリート層への鬱屈を抱えていたことを思えば、決して不思議なものではない。

しかし、人生雑誌の誌面に、知や知識人への憧れがつよく見られたのも事実である。『葦』『人生手帖』といった人生雑誌は、決して庶民の常識知を軽視はしなかったが、それ以上に人文・社会学的な教養への憧れはつよく、それだけに知識人への尊敬も色濃く見られた。だとすれば、知識人への反感と知識人への憧れは、人生雑誌において、いかに両立し得たのか。

戦後のひところまでは、実利に拘泥するのではなく、形而上的な何かを追究しようとする人文知の文化を、ノン・エリートが下支えする局面が少なからず見られた。では、こうした状況は、いかなる社会背景に支えられていたのか。そこには、どのような可能性や限界があり、また、何ゆえに潰えたのか。それを問うことから、現代社会における知のありようを捉え返すこともできるのではないか。これらの問いを念頭に置きながら、本研究では人生雑誌史の検討を行った。

４．研究成果

＜「就職組」と教養メディア＞

人生雑誌に色濃く見られたのは、教養主義的な価値規範であった。「読書を通じた人格陶冶」という教養主義の規範は、かつて旧制高校・大学キャンパスに広く行きわたっていたが、それは、必ずしも学歴エリート層に限るものではなく、庶民レベルでも少なからず見られた。生活記録や思索・哲学的な論説を読むことを通して、「ほんとうの生き方」「真実」を内省的に模索しようとする態度は、思想書・哲学書・文学書を味読することで人格を高めようとする大学キャンパスの教養文化と明らかな親和性があった。

むろん、そこで読まれるものには相違があった。旧制高校生・大学生たちは、カントやヘーゲル、西田幾多郎など、古今東西の古典を手にとり、ときには原書でそれに向き合ったわけだが、多くが勤労青年であった人生雑誌の読者たちにとって、こうした読書は容易ではなかった。

とはいえ、彼らは古典的な思想書・歴史書と無縁なわけでもなかった。人生雑誌には、柳田謙十郎や眞下信一、小田切秀雄らによる哲学・文学の論説が、毎号のように掲載されていた。のみならず、哲学・文学の古典やその解説本が、読書案内で紹介されることも珍しくなかった。

マルクス主義への関心や社会改良への志向も、両者に重なるものであった。河合栄治郎の影響もあって、昭和初期の旧制高校生・大学生のあいだでは、マルクス主義を読み解きながら、人格陶冶の規範と社会改良志向とが併存する動きが見られた。それは戦後も、大学生の反戦運動や 60 年安保闘争へのコミットメントという形で持続した。人生雑誌もその点で重なるところが少なくなかった。マルクス主義に関する読書案内や論説がしばしば掲載された一方、読者たちの職場生活に根ざした労働の問題はむろんのこと、戦争批判や沖縄土地闘争も多く扱われた。

＜「進学組」への憧憬と反目＞

その意味で、内省と読書、社会批判が混然と一体化した人生雑誌の大衆教養主義は、学歴エリートや知識人への憧れに根ざすものであった。義務教育を終えただけの勤労学生が主要読者層であったにもかかわらず、人文系の知識人による論説や読書案内が織り込まれているところには、学歴エリートたちの教養文化に対する憧憬を見ることができる。

折しも人生雑誌が盛り上がりを見せた 1950 年代後半は、大学での教養主義も隆盛していた時代だった。人生雑誌の大衆教養主義は、大学での教養主義文化が高揚する中、それへの憧れを伴いながら、盛り上がりを見せていた。

だが、人生雑誌に見られたのは、学歴エリートへの憧憬や親和性ばかりではない。むしろ、その憧憬のゆえに屈折した反目を生むこともあった。すでに述べてきたように、彼らは試験のための勉強や立身出世のための進学への違和感を、しばしば口にした。人生雑誌の読者たちとて、社会的地位の上昇を願わなかったわけではないことは、通信講座を扱う広告欄の多さからもうかがえる。それを覆い隠してまで、試験や就職のためだけの勉強

を批判するところに、「進学組」に対する「就職組」の屈折した思いが浮き彫りにされていた。
　人生雑誌が、実利を超越した「真実の生き方」を過剰に語ったのも、そのゆえであった。それ自体は、内省や人格陶冶に重きを置くエリート的な教養主義と重なり合う一方、学歴や社会的地位に拘泥する「進学組」とは異なり、自分たちが「純粋」に内省を志向していることを強調する意図が込められていた。そこには、「進学組」への憧れともに、彼らの劣位から脱却したいという「就職組」の心性が垣間見える。人生雑誌における内省の強調の根底には、多分に学歴エリートへの憧憬とそのゆえに導かれる鬱屈があったのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）
①福間 良明「書評 根津朝彦著『戦後『中央公論』と「風流夢譚」事件 ： 「論壇」・編集者の思想史』」『同時代史研究』７、2014 年、122-126 頁、査読無

〔学会発表〕（計　2　件）
①Yoshiaki Fukuma, Fading the “Oblivion of the Memories on War” and Dehistorization — Postwar History of Tokko-Films and the Construction of Memorial Sites on War, Conference: Visualizetion of Japanese History, University of Oslo, Oslo(Norway) Mar.10th,2016

②福間 良明「「戦争の記憶」の変容とメディア文化の戦後―1960 年代末の転換―」 同時代史学会（関西研究会）、関西学院大学大阪梅田キャンパス（大阪府大阪市）、2015 年 12 月 20 日

〔図書〕（計　2　件）
①福間 良明『「働く青年」と教養の戦後史―人生雑誌と読者のゆくえ』筑摩書房、2017 年、全 352 頁

②福間 良明「覆され続ける「予期」――映画『軍旗はためく下に』と「遺族への配慮」の拒絶」好井裕明・関礼子編『戦争社会学』明石書店、2016 年、243(93-122 頁)

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　福間 良明（FUKUMA, Yoshiaki）
　立命館大学・産業社会学部・教授
　研究者番号：70380144

(2)研究分担者
　　(　　)

　研究者番号：

(3)連携研究者
　　(　　)

　研究者番号：

(4)研究協力者
　　(　　)